

# 上野国分尼寺跡確認調査について

## はじめに

高崎市教育委員会では、平成28年度に着手し5年にわたる確認調査を実施しました。地権者並びに地元の皆様には、多くのご協力をいただきありがとうございました。

確認調査によって、上野国分尼寺跡が他国の国分尼寺に勝るとも劣らない規模や内容をもつこと、そして、遺跡として極めて良好な状態で保存されていることが判明しました。さらに、先行して調査が進んでいる僧寺跡との関連を具体的に解明できるようになり、全国の国分寺跡で僧寺跡・尼寺跡ともに調査が十分尽くされているものが少ない中、大変貴重な例となりました。

## 国分寺尼寺とは

国分寺は奈良時代の天平13(741)年に、聖武天皇が仏教の力で国家を災いから護ろうと、当時の日本全域となる60余りの国ごとに建立を命じた寺院で、七重の塔を建て、僧20名をおく「金光明四天王護国寺(僧寺)」と尼10名をおく「法華滅罪之寺(尼寺)」からなっていました。国分寺建立は空前の国家事業となり、当時最高水準の技術が用いられ、この頃は寺院や一部の役所などに限られた、瓦葺き屋根をもつ壮大な建物群が、田園地帯の一角に突如として出現したことは、地方の人々に相当にインパクトを与えたと思われます。

## 上野国分尼寺跡確認調査の目的

広大な敷地をもつ国分寺は、本尊を安置する金堂や經典の講義を行う講堂など重要施設が並ぶ「伽藍地」と管理運営に関わる施設が並ぶ「付属院地」からなっていました。今回調査の目的は、伽藍地の範囲を確定すること、金堂など建物跡の配置・残存状況の確認です。

## 上野国分尼寺伽藍の想像画



現時点の確認調査成果や現存する古代建築などをもとに製作しました。

金堂：本尊を安置する伽藍の中心建物  
講堂：經典の講義や説教をする建物  
尼坊：尼の宿舎、僧寺では「僧坊」  
回廊：中庭を取り囲む屋根付の廊下  
築地塼(築垣)：土を突き固めた壁体に

屋根をかけた区画施設  
鐘楼：梵鐘を設置した、鐘つきの施設  
経蔵：經典など書物を収蔵した建物  
※鐘楼・経蔵の位置は上野国分寺跡などを参考にしました。

## 上野国分寺(僧寺)について

上野国分寺は有力豪族の協力もあり、国分寺建立の詔から約10年後には主要建物が完成したと考えられます。約280年後、平安時代中頃の長元3(1030)年に書かれた文書では、この頃僧寺は、財政難から十分な管理がなされず荒廃し、南大門や築垣は失われていたことがわかり、尼寺の記録は存在しないが同様に損壊が進んでいたと思われ、やがて、14世紀後半頃の南北朝時代までには、主要建物はすべて失われたようです。ただし、塔跡などが上野国分寺の遺跡として後世に伝承され、大正15(1926)年に国史跡に指定されました。

# 上野国分尼寺出土瓦について



古代上野国(群馬県)における瓦生産の中心は笠懸窯跡群(みどり市)、秋間窯跡群(安中市)、吉井・藤岡窯跡群(高崎市及び藤岡市)でした。この3か所のうち笠懸窯跡群は上植木(かみうえき)廃寺(伊勢崎市)に、秋間窯跡群は山上碑にある放光寺と考えられる山王(さんのう)廃寺(前橋市)に国分寺、国分尼寺の創建より数十年ほど前から瓦を供給しています。そして国分寺、国分尼寺の建立にあたっては笠懸窯跡群と吉井・藤岡窯跡群からも瓦が供給されるようになりました。

寺院などの軒先には文様のある軒先瓦(軒丸(のきまる)瓦と軒平(のきひら)瓦)で飾られています。上野国分寺の創建にあたっては、それまでの文様とは異なり上野国分式とも呼べる独特の意匠の軒先瓦が生み出されています。

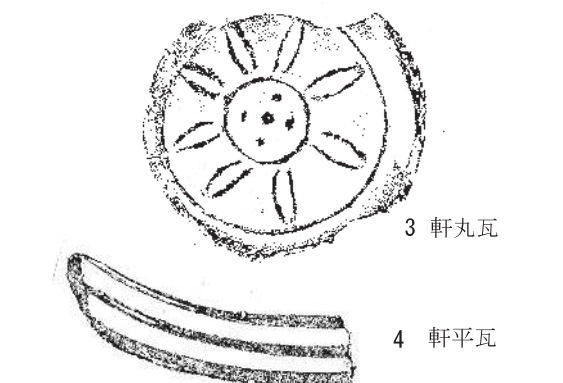
3か所の瓦生産地のうち笠懸窯跡群は比較的早く生産が終わったようで、創建期以降には吉井・藤岡窯跡群製と秋間窯跡群製の瓦が中心となったようです。

国分尼寺の軒先瓦の文様のほとんどは国分寺のものと同じものですが、国分寺ほどのバリエーションは無いようです。一方、国分寺には見られなかった文様の軒先瓦も見つかっているので、必ずしも二つの寺に全く同じ文様の瓦が供給されたわけではないようです。

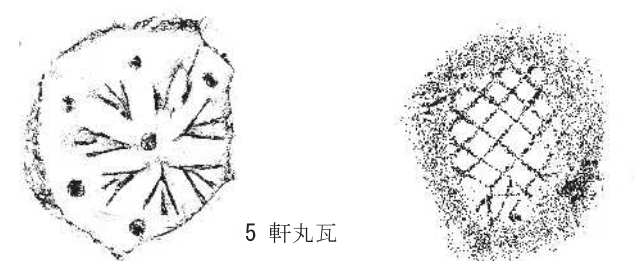
また、古代の瓦には当時の郡・郷の名前や寺の創建、修理に関係があったと思われる人の名前などが文字として残されているものがあります。国分尼寺においてもこのような文字瓦のほか、瓦と同じような焼き物で五重塔を模した瓦塔(がとう)の一部も出土しています。この点でも国分寺と共通しています。このように国分寺と国分尼寺では使われた瓦が同じものと異なるものがあり、瓦に書かれている文字も共通するものとしないものがあります。このような違いがどのような理由によるのかなど今後検討すべき課題があります。



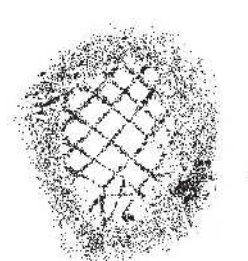
1.2 創建期笠懸窯跡群



3.4 創建期吉井・藤岡窯跡群



5 修造期秋間窯跡群



6 佐位郡の「佐」「仇」に見える

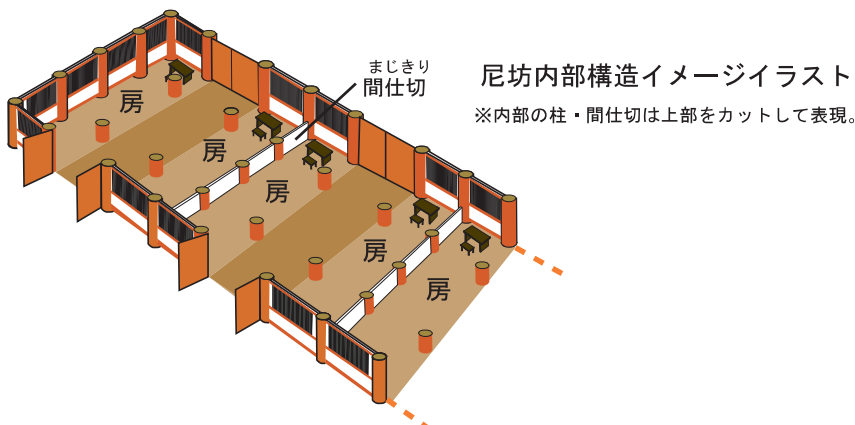
1から5の縮尺は3分の1

6の縮尺は2分の1

## 上野国分尼寺跡確認調査でわかったこと

- 1 伽藍地の範囲は162m四方、当時の計測単位では約540尺（1町半）四方です。  
伽藍地の区画として、北辺と東辺では僧寺のような築地塀（築垣）の痕跡が確認されました。一方、西辺と南辺では築地塀の明らかな痕跡は無く、区画目的と思われる溝跡を確認しました。
- 2 金堂跡、回廊跡、尼坊跡を確認し、伽藍配置がほぼ判明しました。  
尼坊・講堂・金堂・中門は、伽藍南北中軸線に沿って、南向きに直列して配され、金堂正面は回廊で囲まれていました。なお、講堂跡は現時点で明確な基礎痕跡を確認できていません。
- 3 尼坊跡は礎石の残存を6箇所を確認しました。  
建物の規模を柱跡から推定すると、東西45m・南北10.8mで、調査で内容が判明している尼坊としては国内でも最大級です。
- 4 回廊跡では、ほぼ原位置の礎石が東面北半で5箇所と西面北端で1箇所みられました。  
残存した礎石や礎石採取痕から回廊の建物を復元すると、通路の幅は4.2m、四隅の柱芯々距離で東西53.4m・南北41.4mとなります。周囲では屋根に葺かれていた瓦が多量に出土しました。

①尼坊跡調査状況 上空から撮影（上が北）



尼坊は東西に長い建物で、間口では16本の柱が約3m(10尺)の間隔で並び、かずさまじきりまじきりぼう  
上総国分尼寺の例では柱4本ごとに間仕切を造り、内部は「房」と呼ばれる小部屋に分かれていました。今回、間仕切に伴う痕跡は明確ではありませんでしたが、柱数などから上総国分尼寺同様の間取りが想定されます。

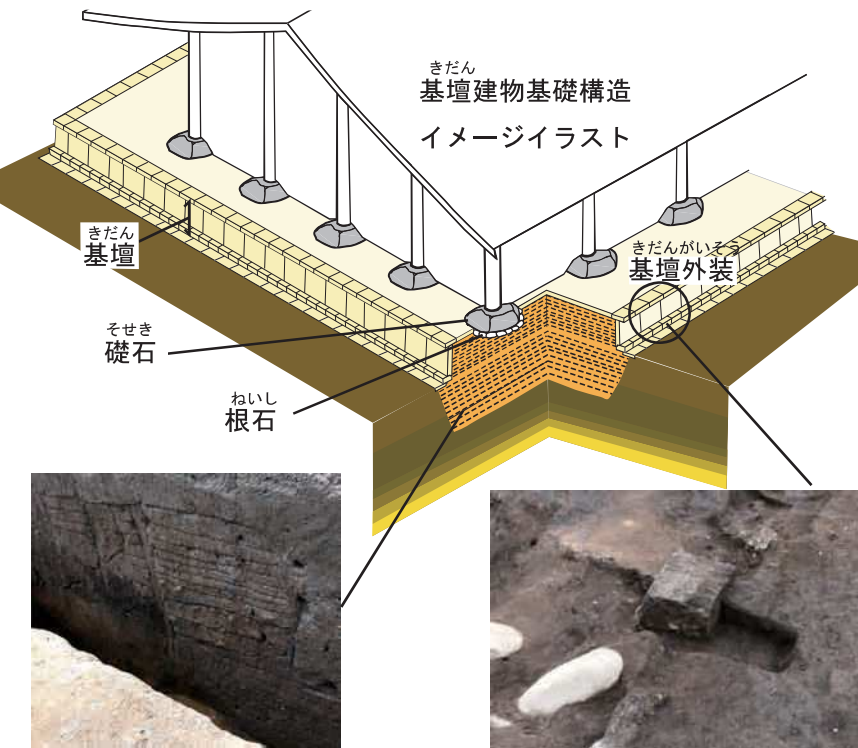
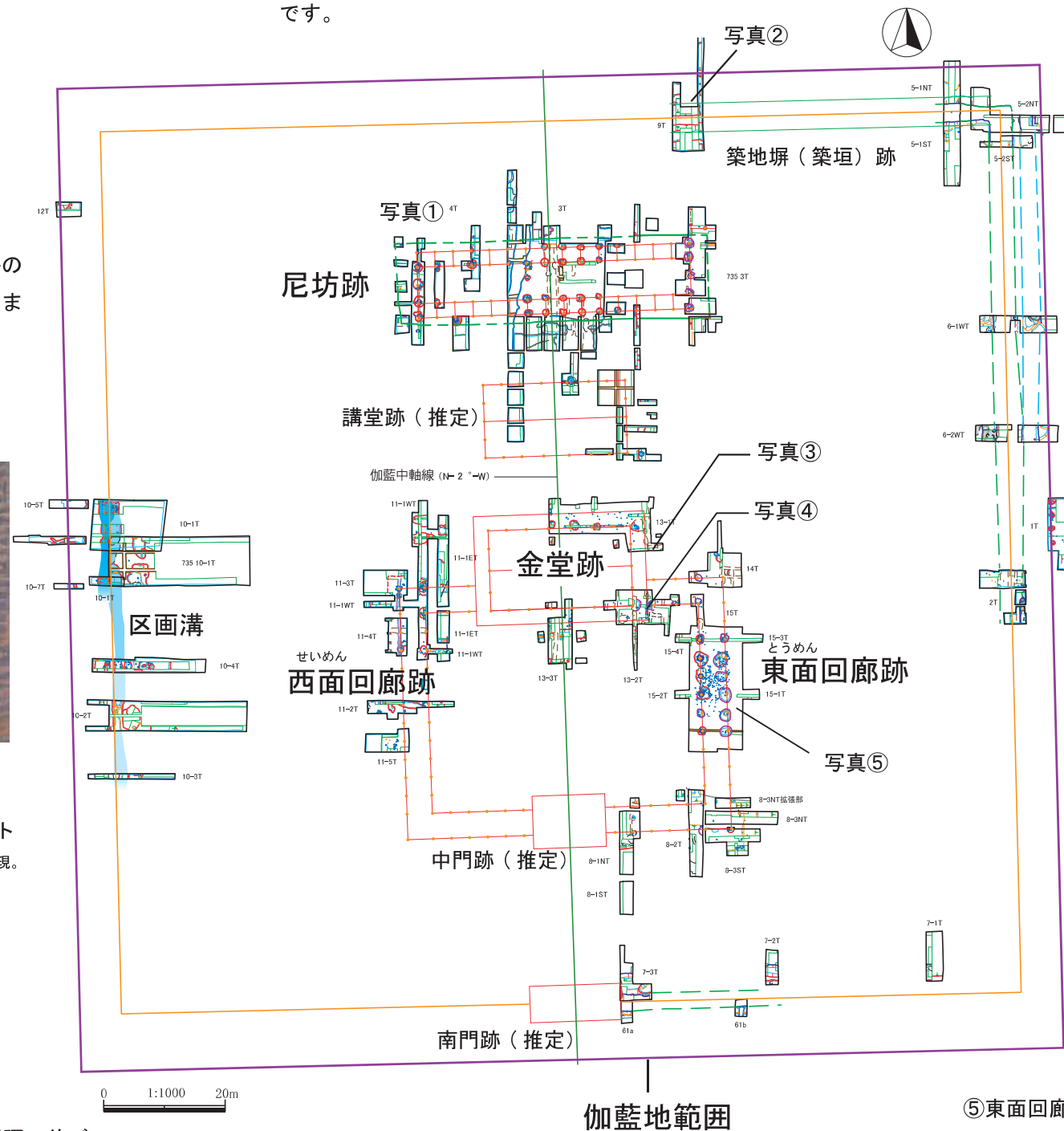


②北辺築地塀（築垣）確認状況（北から）  
確認された築地塀下部は、基部幅4.5m・上端幅1.6m、残存高1.2mのうち上部50cmは盛土です。

「発掘調査のてびき」-各種遺跡調査編-  
文化庁文化財記念物課より



金堂跡・回廊跡調査状況（南東から）



③金堂跡基礎部の断面  
重い瓦屋根をのせるため、「掘込地業」で、基礎を強固にしています。  
※掘込地業：地面を掘り下げた後、突き固めながら埋め戻す地盤改良の一種。

④基壇外装基礎部と思われる切石  
金堂南東隅付近で凝灰岩切石の配列が確認され、切石積基壇が想定されます。  
※基壇外装：基壇保護・装飾目的の施設。

⑤東面回廊跡調査状況（北から）

多くの礎石がほぼ原位置を保ったまま残存し、礎石下には、安定や高さ調節のため入れられた根石がみられました。

